



大坂城攻めはすべてけりが付いた。

熊本大学内の小道をゆく。

バス通りから赤門を抜け黒髪北キャンパスに入ると、遊歩道のすぐ右手の木々の先に小さな建物がある。こじんまりとした佇みの中で大きな歴史研究がなされている。そこは熊本大学永青文庫研究センターである。

永青文庫とは江戸時代に肥後(熊本)を統治した細川家の古文書、書籍、絵図、地図等のことである。それらは公益財団法人永青文庫が所有し熊本大学附属図書館に寄託されており、本センターで研究されている。昨年、その資料から9,346点が一挙に国の重要文化財に指定された。一挙に9,000余点の重要文化財の在る大学となったことに驚いたものである。総点数57,700余点を研究中であるので、この先、何万点の重要な文化財等が誕生するか計り知れない。

昨年11月には国重要文化財指定記念展が学内附属図書館で開催された。どれも凄みのある文書30余点であったが、その中で、「細川忠興自筆書状」は、一段と迫力が感じられた。歴史好きの方はよくご存じであろうが、1615年5月の大坂夏の陣で豊臣家が滅びる。徳川軍における日本中の幾多の大家の中に細川忠興もいた。5月7日ついに難攻不落の大坂城が焼け落ちた。歴史の大舞台のその時を面前で目撃し、業火の城を見ながら午後5時頃(申下刻)、跡継ぎの忠利や家老たちへ書いたその書状が展示された。日本史の決定的瞬間を物語る、生々しい実物である。

「急ぎ申し遣わす。大坂城攻めはすべてけりが付いた。軍勢は必要なくなった。おまえたちは…そこから引き返して豊前に帰国せよ…」

落城し戦が終わったその瞬間を共有させられる。筆遣いの中に息遣いが唸る古文書である。戦場の叫び、業火の音、焦げる匂い、夕刻の薄暗さの中に赤々と照らされる忠興の横顔と迫る感情が浮かび上がるそんな書状であった。

キャンパス
ミュージアム
散策

絵・文
松永拓己
大学院教育学研究科
教授・芸術家

熊本大学永青文庫研究センター

〒860-8555

熊本市中央区黒髪2丁目40番1号
TEL 096-342-2304

※毎年秋の大学祭期間に、
附属図書館で貴重資料展を開催しています。
詳しくは、附属図書館のHPをご覧ください。



〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪2-39-1
Tel.096-344-2111(代表) <https://www.kumamoto-u.ac.jp>

黒髪キャンパス

本荘キャンパス

大江キャンパス

熊大通信のバックナンバーは、
「熊本大学広報サイト 熊大なう。」へ

